

て、土民古より此筈を採て、雪花菜に鹽をまじへて藏し置て、食用とす。西土にても、周禮に筈菹雁醤といひ、爾雅に筈箭朋といへるは、即此竹の筈なれば、彼土にても此筈を食用に供せしかば、由て來ること久しき事なり。扱西土にて矢に作れる竹數種ありといへ共古より會稽に產するものその名高く、即今のすぐたけにして、山居賦にいはゆる筈箭なれば、和漢三才圖會にいはゆる大村の箭竹葉大於馬篠といへるに暗合のもの也。蓋し大村の產は、此竹の其所を得て、本根といへ共屈曲せず、矢に作るには至てよろしきものなるべし。されども古より皇朝にて、矢に作りしは尋常の筈箭にして、此筈箭を用ゆる事を聞ず。凡筈箭は諸國山中に極めて多きものなれば、今より後は肥前人の用ひしにならひて、此竹を以て矢に作りなば、その勁強、西土會稽の產にも劣らざる事明らけし。

〔重修本草綱目啓蒙二十六〕竹

増○中 一種山中路傍ニノス。ト云フ者アリ、高サニ尺許、莖ノ色紫褐ヲ帶ズ、節ゴトニユガミアリテ、正直ナラズ、京都祇園ノ社ノ後ニ、多ク產スルモノハ、山中自生ノ者ヨリ莖高シ、漢名山篠廣新語

〔饅頭屋本節用集左木〕篠サ

〔書言字考節用集六生植〕篠サ、說文、同小竹、同筐

〔日本釋名下草〕小竹、サ

凡小なる物をさゝと云事、まへに玄るすが如し、萬葉に小竹とも細竹ともかけり、

〔倭訓栞佐中編九〕さゝ、神代紀に狹々と見えたる、古事記に訓小竹云佐々、萬葉集に小竹細竹をよめり、さゝやかななる竹也、篠は倭名抄にみゆ、筐は倭の俗字也、神功紀の歌にさゝといふを釋に謂樂也と見えたり、神樂さゝのうたに、